北海道の学校図書館

発　行　北海道学校図書館協会
会　長　黒澤　敏行
事務局長　渡部　浩士
http://sla.gr.jp/~hokkaido-sla/
印刷所　㈱有伸商会
ＴＥＬ（011）814-6211

令和元年度　青少年読書感想文全道コンクール　入賞者決定!!

今年も全道から、たくさんの素晴らしい作品が集まりました。第１次、第２次審査を経て、入賞者が決定しました。１２月１日（日）に晴れの表彰式が行われます。入賞者の皆さん、おめでとうございます。

第65回　青少年読書感想文全道コンクール
第45回　北海道指定図書読書感想文コンクール
特別賞入賞者一覧

北海道知事賞	＊「おねえちゃん」になれてよかった	札幌市北野台小	２年	中川　華
	＊大切なこと	苫小牧市ウトナイ中	２年	久保　友櫻
	＊絶望から希望への架け橋	函館商業高	２年	髙本　弥生
北海道議会議長賞	・出産、パパ大かつやくの日	札幌市澄川西小	２年	井手野愛梨南
	＊「笑顔を守るために」	苫小牧市拓進小	４年	安田　朱里
	＊「海を守るために出来る事」	函館三育小	６年	佐藤　桔平
	＊幸せの意味	教育大附属函館中	２年	狩野みなみ
	＊真の優しさ、真の幸せとは ―「こんなにも優しい、世界の終わり方」を読んで―	札幌旭丘高	１年	岩見　美結
北海道教育委員会教育長賞	・まほうみたいなあめ玉	岩見沢市第一小	２年	安達　莉歩
	・ウィニー、勇気をありがとう	札幌市厚別西小	４年	坂本　温音
	＊「命を飼う」責任	苫小牧市拓勇小	６年	横山　行雲
	・共に築く平和な未来	教育大附属函館中	２年	井川　若菜
	・変身	士別翔雲高	３年	髙橋　実来
北海道学校図書館協会長賞	＊二人で一つのハート	安平町追分小	１年	本多祐実香
	・「ふつう」って何？	室蘭市旭ヶ丘小	４年	小美浪颯士
	・マララが伝える「教育」とは	室蘭市みなと小	６年	篠崎　未來
	・星を目指して	札幌市琴似中	２年	野崎　幸子
	・「及ばぬ」	登別明日中等教育	4回生	佐々木あかり
毎日新聞社賞	・たいようとわたし	苫小牧市拓進小	１年	田野　紗彩
	・心は可能性に満ちている	留萌市留萌小	４年	野々村玲風
	・「走れ私」	音更町鈴蘭小	６年	宇野　仁海
	・ある晴れた夏の朝に届くように	札幌市向陵中	３年	渡邉　光麗
	・「ヒマラヤに学校をつくる」を読んで	遺愛女子高	１年	丸山　紗世
北海道読書推進運動協議会長賞	・「おさがり」をよんで	森町森小	２年	阿部　咲月
	・自己ベスト	帯広市帯広第四中	３年	西島さくら
	・私の罪と罰	帯広柏葉高	１年	宇野　天那
北海道青少年育成協会長賞	・「１パーセントの希望をむねに」	苫小牧市錦岡小	５年	河毛　優芽
	・「ストロベリーライフ」を読んで	小樽市菁園中	３年	小林　莉歩
北海道ＰＴＡ連合会長賞	・「かべのむこうの世界には」	岩見沢市幌向小	５年	大森　花音
北海道高等学校PTA連合会長賞	・小人のヘムが教えてくれたこと	札幌旭丘高	１年	山根　里菜
北海道教育振興会長賞	・石はなにからできている？	室蘭市白蘭小	１年	伴　快斗
	＊「生きるって何」	苫小牧市ウトナイ小	３年	伊藤　瑚雪
	・「みんなちがって、それでいい」を読んで	室蘭市高砂小	６年	長井　悠
	・『ある晴れた夏の朝』と動かされた心	札幌市向陵中	２年	増田　美玖
	・学ぶということ	函館商業高	１年	西村愛美花
北海道教育文化協会賞	・悔いのない人生を	砂川市砂川中	１年	山本　千尋
	・ヒマラヤに学校をつくるを読んで	帯広柏葉高	１年	武居　佐和
はるにれ賞	・お母さん、おそるべし	札幌市清田緑小	３年	東地　賢頼
教育出版社賞	・天国にとどけ！ホームラン	函館市北美原小	５年	久保田凛音
文研出版社賞	・ミミズのふしぎ	室蘭市八丁平小	２年	髙橋　來利
北海道図書教材協会賞	・二人のおじいちゃんから教わった事	室蘭市八丁平小	３年	岡野　日咲
図書館ネットワーク賞	・「みんなの一歩が合わされば」	旭川市愛宕東小	３年	穴吹　瑠
北海教育評論社賞	・初めて知った戦争の一面	森町駒ヶ岳小	６年	青山　琉生
光陽社賞	・のろいアメはまほうのアメ	札幌市大谷地小	２年	豊沢　峰々
光村図書出版社賞	・「しゅんかんは　いっしゅん」	室蘭市水元小	３年	宇井しおり
学校賞	小学校の部	室蘭市立八丁平小学校		
	中学校の部	北海道教育大学附属函館中学校		
	高等学校の部	北海道函館商業高等学校		

＊は、全国コンクール応募作品です。（各部から代表～自由１点・課題１点）

北海道知事賞

「おねえちゃん」になれてよかった

札幌市立北野台小学校　２年　中　川　　華

きょ年の十月、おとうとが生まれて、わたしはずっとあこがれていた「おねえちゃん」になりました。生まれたばかりの赤ちゃんはかわいくてかわいくて、いっぱいおせわをしたり、おてつだいをしたりして、はりきってがんばっていました。でも、だんだん日にちがたつと、がまんすることが多くて、もっとわたしもかまってほしいと思うようになりました。そんな時、いえでこの本を見つけ、ひさしぶりに読んでみました。

この本は、おとうとが生まれて「おねえちゃん」になったばかりのなっちゃんが、いろいろなことにちょうせんして“ちょっとだけ”せいこうするものがたりです。たとえば、のどがかわいたなっちゃんは、いそがしそうなママに言えず、ぎゅうにゅうをこぼしながらじぶんで“ちょっとだけ”コップにいれたり、あさのじゅんびの時も、赤ちゃんのおむつをかえているママに、かみのけをむすんでと言えず、かがみを見ながらじぶんで“ちょっとだけ”しばってみたりしていました。わたしは、この時のなっちゃんの気もちが、とてもよくわかります。おふろ上がりにかみのけをふいてもらいたくても、おとうとのミルクをつくっていたり、はみがきのしあげも、ほんとうは、おかあさんにしてもらいたいけれどおとうさんにしてもらったりと言えずにがまんしていることがいっぱいだからです。でも、わたしのおかあさんは、ねる前にかならず、「大すきだよ。おやすみ。」と言ってギューとしてくれます。すこしはずかしいのでみんなには、ないしょだけれど、わたしにとってはすごくうれしい時間です。

近じょに、もうすぐおとうとが生まれるともだちがいます。その子に「赤ちゃんが生まれたらがまんするときがいっぱいだけど、かぞくがふえてたのしいよ。はなは、おとうとがいてもまい日、ギューしてもらってるよ。」とつたえたいです。やっぱり「おねえちゃん」になれてよかったです。

瀧村　有子　著
『ちょっとだけ』
（福音館書店）

総　評

審査委員長　北海道学校図書館協会副会長　三分一　晶
（札幌市立日章中学校長）

本年度の第65回青少年読書感想文全道コンクール及び、第45回北海道指定図書読書感想文コンクールには、733点の作品が寄せられ、どの作品も秀逸であることに感心いたしました。全ての作品が、各支部における厳正なる審査を突破して寄せられた作品だけあって、最初から読み手の心をがっしりと掴み、感動したことが素直に伝わってくる完成度の高い作品ばかりでした。仕上がりの精巧さや質の高さに驚きと共感を覚えました。子どもたちが、純真な眼差しと清純な心で読書に励み、真摯に綴った作品には、個性を磨く豊かな感性が感じられるものです。今回作品を応募された児童生徒の皆さんの頑張りはもちろんのことですが、これまで具体的な指導にあたってこられた先生方や子どもたちの健やかな成長を願い、温かくも厳しくご教示くださっている保護者の皆様方のご尽力に対しまして、心より敬意を表します。

本コンクールの審査は、小学校低・中・高学年の三つの部門と、中学校及び高等学校の各部門の５部門に分かれ、総勢25名の審査員により厳正に審査いたしました。子どもたちの活字離れが懸念される昨今ですが、読書感想文に取り組むということは、活字で綴られている一冊の本を、最後まで読み切ることから始まる学習活動であり、読書活動の価値について、あらためて実感する機会となりました。また、読書を通して広がった学びや深まった思いを材料に、言葉を吟味しながら表現を重ねていき、作品化を目指す一連の取組の価値については誰もが認めるところです。発達段階は、物事や事象のとらえ方、感じ方に反映されます。各成長段階にふさわしい作品に出会うと、妙に新鮮な印象が残り、感動が心に宿ります。本人の心の底から純粋に湧き出た、本物の表現だからこそ、読み手の心を打つに至るのだと思います。

今回応募いただいた皆さん方には、ぜひ、身近な友達や知り合いに、皆さん方が感じている読書感想文の魅力についてを、積極的に伝え広げてほしいと思います。今後とも、自分の日常生活に読書体験を大切に位置付け、自らの人格形成に役立ててほしいと期待しています。併せて、今年度の皆さん方の素晴らしい取組が、自らの未来を、希望をもって切り拓いていく、自信につながっていくことを願っております。

北海道知事賞

大切なこと

苫小牧市立ウトナイ中学校　２年　久　保　友　櫻

「お母さん、だめだった……。」

ずっとこらえていた涙が溢れてくる。けれど、先に大粒の涙を流したのは、母のほうだった。母は、なにも言わずに、ただ私を抱きしめてくれた。

二年前の冬、ずっと目標にしてきたピアノのオーディションがあった。小学校一年生の頃から始めたピアノ。ピアノを弾いている時間はなによりも楽しくて、様々な曲を弾けるようになるのが嬉しかった。

後に、学校での発表会などでも、合唱曲の伴奏を任せてもらえるようになり、その集大成ともいえる、あるオーディションに挑むことが、私の目標になった。

今までに、あんなに頑張ったことはあっただろうか。毎日、何時間もピアノの練習をし、こんなに努力したのだから大丈夫だと自分に言い聞かせ、本番に挑んだ。

結果は落選。初めての挫折だった。悔しくて、悲しくて、負けたという感情だけが次から次へと溢れてくる。涙が止まらなかった。

あの日から、どうせ私なんかと、他の誰かと比べてばかりいる。頑張っても勝てない、一番にはなれないと、私の後ろ向きな気持ちは、なかなか前を向くことができない。私の中の時計の針は、止まったままだ。

「おまえはスーパーヒーローさ」

ＡＤＤという障害を抱えたジョセフに、おじいちゃんがかけた言葉。ページをめくる手が止まり、急に目頭が熱くなった。

最初は、私も他に気を取られているときに無意識にしている返事を覚えていなかったり、特に意味のないことを無駄に覚えていたりすることがあるなと、ジョセフに共感し、自分と重ねて夢中で読んでいたのだが、急に思い出してしまった。

思い返せば、あの日、母も同じようなことを言っていた。母にとっては一番だよ、と。

けれど、あの時は素直に受け止めることができなかった。本当の一番でなければ意味がないのだと。そしていつしか、勝ち負けにこだわるようになってしまったのかもしれない。

中学生になると、中間テスト、期末テスト、学力テストと、テストばかりだ。そして、点数とともに順位がでる。

担任の先生に言われたことがある。

「大切なのは、順位ではなくて点数だよ」と。

けれど、周囲の友人たちと比べ、一喜一憂してしまう日々。

そんな私にとって、Ｔ先生の言葉は衝撃だった。

「ほかのだれのでもない、自分だけのベストをめざすのよ」

自己ベスト。考えたこともなかった。あのときから、周囲の目ばかり気にしている。過去の自分自身と比べるなんて、思いもしなかったことだ。そして、続けることの大切さ。

ジョセフは、注意力が持続できない、衝動性が強いなどの特徴をもつ障害を抱えながらも、クロスカントリーという競技に挑戦し、自己ベストを目指す。そして、最後には自己ベストを達成するのだ。

私は今まで何を目指してきたのだろう。何に悩んでいたのだろう。昨日よりも今日、今日よりも明日、前回の点数よりも一点でも上がるように努力すればいいんだ。ライバルも、目標も、自分自身なんだ。担任の先生の言葉の意味が、やっとわかったような気がした。

ジョセフの周りには、たくさんの味方がいる。「みんな何かしら問題はかかえてるよね」と、さらっと言ってくれた友人ヘザー。あえてクロスカントリーを勧めてくれたＴ先生。そして、ジョセフが欠点と捉えていることをプラスに捉えて、「そんなおまえが大好きなんだよ」と言ってくれるおじいちゃん。

そんな温かい登場人物に触れながら、私にとっての一番の味方である、家族という存在を再認識させてくれた。

私がなにか失敗しても、「らしいね」と笑い飛ばしてくれる父親。一緒に泣いたり、笑ったり、いつも一番近くで寄り添ってくれる母親。辛いことがあっても、隣にいるだけで自然と笑顔にしてくれる妹。

ジョセフも、私も、みんな誰かに支えられて生きている。当たり前のことだけれど、当たり前のことだからこそ、普段気付けないことは多いのかもしれない。

この本の最後にでてくる、ジョセフの言葉が私はとても好きだ。

「その何かを乗りこえて、べつのことがおこる。そしてまたべつのことも。それも乗りこえられる。そしていつか、また想定していなかった何かにやられて、気づくんだ。それって最高のことなんだって」

誰にだって明日はくる。昨日よりも今日、笑顔でいられるように、一歩一歩、自己ベストを目指すんだ。最高の一日にするために。

とても暑かった今年の夏。私の中の時計の針は、ようやく動き出したような気がする。

『サイド・トラック
走るのニガテな
ぼくのランニング日記』
ダイアナ・ハーモン
・アシャー（評論社）

北海道知事賞

絶望から希望への架け橋

北海道函館商業高等学校　２年　髙　本　弥　生

夜の海に浮かぶ二百隻以上もの漁船。船の灯りはイルミネーションのように眩しく、不気味なほど綺麗だった。その光の海に引きずり込まれるのではと、強い恐怖すら感じた。

八年前の三月十一日、私の八歳の誕生日の夜、津波により、町中の船が沖合いに避難していた。漁師である父の船もその中にあった。

「一口に被災したっていっても、いろいろだよね。」梨乃の言葉に妙に納得した。

遠く離れた北海道で、人的被害はなかったものの、我が家の養殖ホタテの稚貝の半分以上が被害を受けた。何日も続く、養殖施設の残骸処理作業で、両親達は疲れ果てていた。

あの日、私は町の総合体育館に避難した。結局、誕生日ケーキを食べたのは深夜になった。凄惨な映像をテレビで見る度、この日に誕生を祝うことに申し訳なさを感じ、素直に喜べない自分がいた。この混沌とした感情が渦を巻き、「どうして誕生日がこの日なのか？」という途方も無い疑問の答えが見つけられず、モヤモヤしていた。

東北の被災地の人の苦労や悲しみに比べたら、私の悩みなんてちっぽけなものかもしれない。誰のせいでもない。「あんなことさえなければ」梨乃や佑香が言うように、やり場のない気持ちは誰にもぶつけようがなかった。

被災したことを隠したい梨乃と、笑顔で被災者だということをさらけ出す遼、受けた心の傷はそれぞれ異なり、不幸の多寡など量れるものでもない。皆その痛みを抱えて生きていく。人、時間、場所によって様々な傷を負っている。十人いれば十の体験があり、一つとして同じものはない。分かち合えることはなく、痛みの共有などできないのだ。

だからこそ、一括りにせず、相手の気持ちを尊重し、考えを理解しようとすることが必要なのだと思う。純粋に今、私ができることは、相手に関心を持ち、知ろうとすること。更に、自分視点から相手視点に切り替えることで、新しい気付きが生まれる。

心に寄り添う共感力を高めることは、相手に安心感を与えることが出来るだろう。

善意からの差別、親切心や同情心という自己満足は、相手を傷つけることもある。紅実のおかげで孤立せずに済んだが、その心遣いに苦しみ、「絆」という言葉が好きになれず嫌いとまで言いそうになった梨乃に胸が締め付けられる思いがした。もしかしたら私も、何気ない言動で無意識に誰かを深く傷つけているのかもしれない。

「かわいそうな被災者」という役を強いられたみたいできつかった、という梨乃は心に鎧をまとい、同じ中学出身者のいない高校に進学する。私も、出身中学校からただ一人、今の高校に進学した。先入観なく、まっさらな状態で受け入れて欲しかったからだ。中学時代、いじめられたり、避けられたりしたわけではないが、親友と呼べる友達もいなかった。弱さを隠し、表現することが苦手な私は表の自分を出せずにいたのだ。そこには、心の隔たりの川が流れていたのかもしれない。

そんな中、吹奏楽部に入り、打楽器が私の心の支えになった。身近に集中できる音楽の存在に、随分助けられたと思う。人前で演奏することは達成感にもつながった。自己肯定感が高まり、新しい環境の中で出会った価値観の合う友達は、私の心の支えとなっている。

だから、梨乃が吹奏楽を選んで良かったと心から思った。サックスを通じ、友達や先輩との関わりの中で少しずつ気持ちが変化し、成長していく姿は、等身大の自分と重なり、なんだかほっとした。

文中に、吹奏楽の曲名や音楽用語がいくつも出てきて、どんどん読み進められた。

「復興」は吹奏楽コンクールで何度か聞いたことがある曲だった。連符が多く難しそうというのが第一印象だ。改めて聴いてみると、自分の担当ということもあり、打楽器が耳に入ってくる。シロフォンの速い動きに胸が高まった。ソロがあるティンパニーは、躍動的で重厚感があり何度も聴き返した。目を閉じて聴いていると、管楽器の音色と相まった不気味さに、あの日の光の海が頭の中に広がった。だが、その思い浮かんだ光景に、以前の悲観的な自分はいない。それは、この本に出会い、精一杯目一杯、今を生きることが大切だとの答えを導き出すことが出来たからだ。

過去の悲しみや怒りに目を背けるのではなく、向き合うことで、絶望から希望に変えていける。大事な人を亡くした被災者の心情を知ることで視野が広がり、感謝する気持ちを再確認することも出来た。

人と人との間には川がたくさんあるという。川の向こうとこちらで、助かった命と失われた命がある。そして、目に見えない気持ちの上での心の川もあるのだと。

今、私の前には進路という大きな川が流れている。橋を渡りきる為に、努力を惜しまず知識と経験を積み重ねていきたいと思う。

川の向こうのまだ見ぬ未来に想いを馳せて。

濱野　京子　著
『この川のむこうに君がいる』
（理論社）

北海道議会議長賞

「笑顔を守るために」

苫小牧市立拓進小学校　４年　安　田　朱　里

「おじいちゃん、施設に行くことになったんだって」と母から聞いた時、私は胸が苦しくなり、言葉が出なかった。祖父は今、頭のケガで入院している。家に帰りたがっていることを、私は知っていた。

この本の主人公のジュリアのおばあちゃんも、施設に行くことになった。ジュリアは、そのことに反対だった。私はジュリアの気持ちがよくわかったし、大好きな家から引きはなそうとするジュリアのとうさんとかあさんのことを、一瞬で嫌いになった。

でも、施設に移った後にジュリアは

「よかったかもしれない」

という気持ちに変わっていた。私は納得ができなかった。だから、その理由が知りたくなった。

おばあちゃんは認知症で、ジュリアのことを忘れたり、寒さも感じず、自分がどこにいるのかもわからなくなっていた。

私の祖父も、お見舞いに来た人が誰なのかを忘れたり、来たこと自体を忘れてしまう。

もし、認知症の人が一人で暮らしていたらどうなるかを考えてみた。寒さを感じられないと凍死の危険があるし、地震や火災の時、身を守る方法を忘れていたら命が危ない。自分がどこにいるのか分からなく、迷子になるかもしれない。調べてみると、昨年認知症での行方不明者は約一万七千人で、中には事故で亡くなった人もいた。この事実を知り、私はとても怖くなった。そして、ジュリアの気持ちが少しわかった。おばあちゃんが笑顔でいるために、安全な場所で支えてくれる人が必要だったんだ。私の祖父も同じだと思った。

この本には、至る所にわすれな草が描かれている。花言葉は、本の題名と同じ「わたしをわすれないで」だ。「わたし」って誰だろう？最初は「おばあちゃん！ジュリアを忘れないで！」というジュリアの気持ちかと思った。でも、「おばあちゃん！おばあちゃん自身を忘れないで！」というジュリアの願いかもしれない。おばあちゃんがジュリアを忘れていても笑顔にしたくて、おばあちゃん自身を忘れて欲しくなくて、大好きなわすれな草をいっぱい見せてあげようとしたんだと思う。

私も、祖父の笑顔が見たくてお見舞いに行っている。手紙に祖父と私の似顔絵を描いて渡すと、笑顔で喜んでくれ、ベットの周りは、看護師さん達がビックリするほど私からの手紙でいっぱいになっている。祖父は、私のことだけは鮮明に覚えてくれている。

でも、いつか大好きな祖父が私のことを忘れる日が来るかもしれない。その瞬間、私はショックで言葉が出ないだろう。その時、ジュリアを思い出したい。祖父が私を忘れても、私は祖父を覚えているし、間違いなく私の祖父だということを、ジュリアが教えてくれる。

そんなことを考えていたら、すごく祖父に会って話がしたくなった。また、似顔絵の手紙を持っていったら、きっと喜んでくれる。

ナンシー・ヴァン・ラーン　著

『わたしをわすれないで』

（マイクロマガジン社）

北海道議会議長賞

「海を守るために出来る事」

函館三育小学校　６年　佐　藤　桔　平

ぼくの住む街、函館は美しい。函館山から見る、函館湾と津軽海峡が織り成す景色は、何度見ても、うっとりしてしまう。ぼくの家の近くにも海がある。天気のいい日には、対岸に、うっすら津軽半島が見える。ぼくは、海の街、函館が大好きだ。今年の夏は、海の清掃活動のボランティアに参加した。ペットボトル、あき缶、お菓子の袋等、ポイ捨ての多さにおどろいた。拾ったゴミには、韓国語や中国語のものがあり改めて世界は海でつながっている事を実感した。

ぼく達の海で、今起きている現実をもっと知りたいと思い、この本を読んだ。そこにはタイの海岸に打ちあげられたクジラの胃から大量のプラスチック袋が出てきたと書かれていた。クジラの声なき訴えがぼくの胸をしめつける。ぼく達は、買い物した時に、もらうレジ袋があたりまえになって、便利である事すら忘れてしまってはいないだろうか。人間が作り出した便利なプラスチックが原因で、海の生物が苦しみ、やがて、地球を壊していくとしたらどうだろう。何かのぎせいの上に成り立つ便利を望み続けるのか。人間は便利さと引きかえに、おそろしいモンスターを生み出してしまったのかもしれない。プラスチックは、海に入りこむと小さく割れて、マイクロプラスチックに姿をかえ、永遠に海を汚し続ける。東京湾の魚の体内からも、マイクロプラスチックが見つかっている。食物連鎖に入りこみ、人間も食べている可能性が高い。プラスチックは、海だけでなく人間をもむしばんでいく。新聞でＧ２０サミットの記事を読んだ。そこには、海洋汚染の原因となっているプラスチックゴミについて話し合われた事、日本では、２０２０年４月にも、小売店で配布されるレジ袋の有料化を義務付けると書いてあった。人間は失敗もするけど、それに気がつき間違いを修正する力を持っている。

ぼく達は、海からたくさんの恵みを受けている。その事に感謝し、海が壊れてしまう前に出来る事を家族で話し合った。ぼくの両親は観光地で小売店をしている。会社の備品置き場には、大量のレジ袋がある。このレジ袋の配布数を少なくする為、意見を出しあった。その結果、レジ前に簡易包装への協力をお願いするポップを貼る事にした。ポップはぼくが担当した。クジラのイラストをつけて短い言葉で伝わるように工夫した。実際に、数時間だがお店にも行った。印象的だったのは、外国の方の環境に対する意識の高さだ。自分から袋はいらないと断る姿は清々しかった。笑顔でリュックからマイボトルとエコバックを出して見せてくれた方もいた。性別、年齢、国籍を問わず、同じ方向へ進んでいると思い、力強さを感じた。ぼくの一歩は、小さいけれど、一人でも多くの人が一歩をふみ出せば、大きな力になる。そして、それを続けることこそが大切だ。

これからも海について考え、世界とつながる、ふるさとの海を大切に守っていきたい。

保坂　直紀　著

『クジラのおなかからプラスチック』

（旬報社）

＼ 2019年度 ／
北海道の先生がおすすめする本

北海道指定図書

小学校中学年の部

きくち駄菓子屋

かさい まり／作　しの とうこ／絵
アリス館　定価1,200円+税

引越してきて、僕の最初の友だちは、きくち駄菓子屋のじいちゃん。小学校4年生の浩介とじいちゃんの心温まる話。

みずとはなんじゃ?

かこ さとし／作　鈴木 まもる／絵
小峰書店　定価1,500円+税

あさおきて、かおをあらう水。うがいをしたり、のんだりする水。水とはどんなものなのでしょう?科学する心を育む絵本。

ナージャの5つのがっこう

キリーロバ・ナージャ／文　市原 淳／絵
大日本図書　定価1,400円+税

ページをめくるたびに国々の様子にびっくり!幼い頃生活した国々の学校生活を筆者本人を主人公に楽しく描いた絵本。

中学校の部

泥

ルイス・サッカー／作　千葉 茂樹／訳
小学館　定価1,400円+税

タマヤたちの学校は立ち入り禁止の森に囲まれていた。森でいったい何が起きているのか?これまでにない近未来パニック小説!

ノベライズ
パパはわるものチャンピオン

板橋 雅弘／著　藤村 享平／脚本
岩崎書店　定価1,300円+税

パパの仕事を知らないショータ。こっそりパパの仕事を調べに行くと、なんとわるものレスラー!? 映画化された感動物語。

小学校低学年の部

きのうをみつけたい!

アリソン・ジェイ／作・絵　蜂飼 耳／訳
徳間書店　定価1,800円+税

楽しかったきのうにもどりたいけど、どうやったらできるかな? おじいちゃんにきいてみたら…?未来への希望を描く。

たったひとつのドングリが
ーすべてのいのちをつなぐー

ローラ・M・シェーファーとアダム・シェーファー／文
フラン・プレストン=ガノン／絵　せな あいこ／訳
評論社　定価1,400円+税

たったひとつのドングリが木に育ち、たくさんの動植物の命をささえていることを、シンプルな言葉と美しい絵で伝えます。

あめだま

ペク・ヒナ／作　長谷川 義史／訳
ブロンズ新社　定価1,500円+税

「リモコンがはさまって痛い」と椅子の声が。あめだまを食べると聞こえる心の声。人気作家が描く少年の成長物語。

バッタロボットのぼうけん

まつおか たつひで／作
ポプラ社　定価1,500円+税

ふしぎなロボットにのって、ジャングルや海などの大自然を冒険。世界中の生き物の知識と、好奇心がつまった絵本です。

小学校高学年の部

メロンに付いていた手紙

本田 有明／文　宮尾 和孝／絵
河出書房新社　定価1,300円+税

メロンに付いていた手紙から始まった2人の小学生の交流。東京と夕張、それぞれの素晴らしさに出あうひと夏の物語。

赤はな先生に会いたい!

副島 賢和／著
金の星社　定価1,400円+税

入院中の子どもたちへのケアの大切さに気づき、院内学級の先生になった!生きる勇気を与えてくれるノンフィクション。

みんなちがって、それでいい
パラ陸上から私が教わったこと

宮崎 恵理／著　重本 沙絵／監修　ポプラ社　定価1,300円+税

パラリンピックメダリストが自身の障がいと向きあい、受けいれた過程と、夢に向かって進む姿を描くノンフィクション。

感想文は夏休み明けに、学校に出してください。
詳しくは、「応募のきまり」をご覧ください。
●ホームページ　北海道学校図書館協会　検索

北海道の本を読みましょう!

第65回　青少年読書感想文全道コンクール　第45回　北海道指定図書読書感想文コンクール

■主催／北海道学校図書館協会・毎日新聞社北海道支社
■後援／北海道・北海道議会・北海道教育委員会・公益財団法人北海道青少年育成協会　■選定協力／北海道読書推進運動協議会

優 秀 賞

小学校（低学年）の部（12名）

作品名	氏名	学校名	学年
・「教室はまちがうところだ」を読んで	渡邊開惺	苫前町古丹別小	２年
・けんかの気もち	木島碧	函館市湯川小	２年
・「ともだちっていいな」	中村美優萌	札幌市新琴似小	１年
・やさしいこころ	干場詩栞	旭川市緑が丘小	２年
・「こころはつながる」	南川安実	室蘭市水元小	１年
・のろいアメは、大すきを思い出させるまほうのアメ	志貴美遥	札幌市山の手小	２年
・魔女ののろいアメ	小関夏果	札幌市伏古小	２年
・分かる、分かる、サキちゃんの気持ち	石村明紗	苫小牧市明野小	２年
・えがおのアメ	三国華苑	森町森小	１年
・「じぶんの心を見つけよう！」	佐藤結歩	室蘭市高砂小	２年
・たったひとつのドングリが	太田樹	函館市北美原小	２年
・あめだまをよんで	米田剛輝	室蘭市海陽小	１年

小学校（中学年）の部（12名）

作品名	氏名	学校名	学年
・「新聞はすみずみ読みます」	山田滉陽	豊頃町大津小	４年
・言葉は生きている	伊藤みなみ	苫小牧市苫小牧東小	４年
・あこがれの宇宙	渡邊咲子	函館市北美原小	４年
・『うみどりの島』を読んで	矢野涼菜	滝川市西小	３年
・「かみさまにあいたい」を読んで	渡邊菜乃晴	滝川市滝川第三小	４年
・「季節のごちそうハチごはんを読んで」	髙澤真桜子	室蘭市喜門岱小	４年
・「伊知地さんが教えてくれたこと」	南川安菜	室蘭市水元小	３年
・強くてやさしい男になる	三国蓮旺	森町森小	３年
・「心の中の家」	岩本亜澄	札幌市福住小	４年
・「みずとはなんじゃ？」を読んで	岡崎音花	室蘭市八丁平小	４年
・「みずとはなんじゃ？」を読んで	安田理央奈	士別市士別南小	４年
・きくち駄菓子屋を読んで	吉岡ゆめ	滝川市滝川第三小	３年

小学校（高学年）の部（12名）

作品名	氏名	学校名	学年
・「出会いへの感謝」	山内颯大	苫小牧市ウトナイ小	６年
・プラスチックから豊かな自然を守るために	岡野衣吹	室蘭市八丁平小	５年
・「生きる　劉　連仁の物語」を読んで	斧原楓	旭川市東五条小	６年
・さわこのじてんを読んで	中居琉南	室蘭市八丁平小	５年
・『マンザナの風にのせて』を読んで	小川絢世	留萌市緑丘小	６年
・もうひとつの屋久島から	中川実玲	函館市北美原小	６年
・かべをなくすということ	中村桜介	上士幌町糠平小	６年
・勇気があればかべは消せる	池田詞華	森町駒ヶ岳小	５年
・「笑顔を運ぶホスピタルクラウン」	工藤航樹	室蘭市海陽小	６年
・本当の思いやりとは	伏見凪央	旭川市愛宕東小	６年
・「みんなちがって、それでいい」を読んで	岸本梨桜	旭川市緑が丘小	５年
・「『みんなちがって、それでいい』～パラ陸上から私が教わったこと～」	二本柳岬希	函館市えさん小	６年

優 秀 賞

中学校の部（15名）

作　品　名	氏　名	学　校　名	学年
・私達を取り巻く普通	藤田千草	士別市士別南中	３年
・色	山口美咲	登別明日中等教育	1回生
・「銀色の青」を読んで	笹村舞子	士別市多寄中	２年
・生きる	三木希海	室蘭市本室蘭中	１年
・記憶と家族	中島実咲	芽室町芽室中	３年
・「あと少し、もう少し」を読んで	品川咲季	小樽市菁園中	３年
・自分自身を生きる	大沢穂香	岩見沢市光陵中	３年
・一歩ずつ	佐伯愛花	留萌市留萌中	１年
・もう、繰り返さない	嵐田佐和子	苫小牧市明倫中	２年
・「ある晴れた夏の朝」を読んで	柏木碧海	小樽市菁園中	３年
・「原爆」とはなんだったのか？	田中留里子	北見市北中	３年
・たゆまぬ努力	寺田智紀	小樽市菁園中	２年
・原爆、戦争という“罪„～「ある晴れた夏の朝」を読んで～	髙澤真佑子	登別明日中等教育	1回生
・泥	木村藍梨	帯広市帯広第二中	２年
・「親子とは」	齋藤蓮	知内町知内中	２年

高等学校の部（13名）

作　品　名	氏　名	学　校　名	学年
・ジョン万次郎	刈屋悠歌	登別明日中等教育	4回生
・『女の一生』を読んで～伊藤を通じて感じたこと～	児玉優子	札幌聖心女子高	２年
・変身	髙橋希実	士別翔雲高	３年
・変身	髙橋京太郎	士別翔雲高	３年
・「普通」なんてない時代に	屋代愛羽	函館白百合高	２年
・「アルジャーノンに花束を」を読んで	中野李咲	遺愛女子高	２年
・家族のつながり	磯村葵子	遺愛女子高	２年
・「こころ」を読んで	伊藤万結	帯広三条高	３年
・「河童」を読んで	明石桜花	帯広柏葉高	１年
・「のこす言葉 三浦雄一郎 挑戦は人間だけに許されるもの」を読んで	長澤田鶴	帯広緑陽高	３年
・川のむこう	北川琴花	旭川藤星高	１年
・オピニオン	堤まこ	遺愛女子高	２年
・「ヒマラヤに学校をつくる」を読んで	吉田茉莉香	遺愛女子高	１年

◆感想文集『北海道の読書』（令和元年度版）の普及を

第65回青少年読書感想文全道コンクール入賞作品集

○小学校版（1,000円）
特別・優秀・優良　入賞者全作品を掲載

○中学校・高等学校版（1,000円）
特別・優秀・優良　入賞者全作品を掲載

【申し込み・問い合わせ先】
北海道学校図書館協会ＨＰ ＞ 読書感想文コンクール ＞ 北海道の読書 ＞ 学校宛・個人
札幌市立西岡南小学校　教諭　佐藤秀則　　FAX　011-582-1590

■12月28日までに「北海道学校図書館文集会計」宛に、申込・送金をお願いします。
１月下旬にお届けを予定しています。詳しくは、ホームページをご覧ください。
締切を過ぎての申込の場合、２月下旬のお届けとなります。

優　良　賞

小学校（低学年）の部

羽幌町羽幌小	２年	逢坂　彪我
苫小牧市ウトナイ小	１年	山内　杏倫
函館市湯川小	２年	関根　心美
旭川市緑が丘小	１年	池内　咲心
教育大附属函館小	１年	伊藤　聡佑
函館市北美原小	２年	川口りいな
函館市北美原小	２年	工藤　悠聖
増毛町増毛小	１年	石田　奏翔
岩見沢市幌向小	２年	髙橋謙太朗
函館市港小	２年	大河原侑貴
室蘭市知利別小	２年	伊勢　悠希
岩見沢市南小	２年	堤　柚葵
室蘭市八丁平小	１年	菅原　優花
室蘭市八丁平小	２年	熊谷　優輝
函館市北美原小	２年	高田　もあ
札幌市白楊小	２年	川上けいご
旭川市神楽小	２年	小沼　奏翔
別海町別海中央小	１年	梅澤理香子
函館市湯川小	２年	和泉　沙優
室蘭市八丁平小	２年	武藤　晃希

小学校（中学年）の部

函館市大森浜小	３年	齊藤　禅
室蘭市八丁平小	３年	四方　奏
小平町小平小	４年	堺田　真央
札幌市澄川西小	３年	三浦百々音
札幌市新琴似南小	３年	上野　晴南
苫小牧市ウトナイ小	４年	山内　悠万
滝川市滝川第三小	４年	渡邊柚乃花
函館市北美原小	４年	酒井　夏
函館市深堀小	４年	長南　琉海
函館市本通小	４年	門田　亜采
札幌市福住小	４年	長内　航平
旭川市西御料地小	４年	西野目実亜
札幌市円山小	３年	村尾優衣花
旭川市永山小	３年	佐藤　心咲
帯広市大空小	４年	道見瑚太郎
小樽市山の手小	４年	荒又　紗良
教育大附属旭川小	３年	富居　玲衣
室蘭市海陽小	４年	伊藤　莉子
教育大附属旭川小	３年	平松　昊
旭川市緑が丘小	４年	野口　彩

小学校（高学年）の部

滝川市東小	５年	内藤里俐花
教育大附属旭川小	６年	富居　嵩太
岩見沢市栗沢小	５年	山下　梨佳
旭川市東町小	５年	荒谷　成美
札幌市新光小	５年	佐藤　奈央
増毛町増毛小	５年	福原　花純
帯広市豊成小	５年	石田　明莉
北斗市上磯小	５年	木村　翠有
音更町木野東小	５年	清水　陸叶
岩見沢市幌向小	６年	二瓶　優生
上士幌町糠平小	６年	伊東　海里
留萌市留萌小	５年	福岡　唯
札幌市清田緑小	６年	東地　心菜
室蘭市八丁平小	６年	安田　智香
苫小牧市美園小	６年	多田　結子
札幌市新発寒小	５年	川渕　綾紗
七飯町大中山小	６年	川村　真空
札幌市桑園小	６年	宮﨑ほのか
旭川市陵雲小	５年	工藤　大誠
苫小牧市沼ノ端小	５年	関之尾穂花

中学校の部

室蘭市桜蘭中	３年	髙村　菜央
北嶺中	３年	中野　剛瑠
遺愛女子中	１年	関根　凜咲
旭川市愛宕中	１年	島田　礼愛
留萌市留萌中	１年	徳丸　美穂
砂川市砂川中	３年	室井　紗和
旭川市神楽中	２年	村上　帆南
岩見沢市緑中	３年	平田　真菜
岩見沢市緑中	１年	北口　楓花
芽室町芽室中	３年	奥山莉里花
登別明日中等教育	2回生	高橋　沙綺
登別明日中等教育	1回生	寺沢　美柚
苫小牧市明倫中	２年	天満　咲希
北見市北光中	３年	佐々木志恩
北斗市大野中	３年	金澤　朋希
札幌市発寒中	２年	小野田百合奈
藤女子中	１年	野崎愛加利
留萌市留萌中	３年	佐藤　美緒
留萌市港南中	３年	山岸　時大
旭川市広陵中	２年	工藤　侑和
滝川市明苑中	３年	山田野乃果
室蘭市桜蘭中	１年	佐藤　優実
滝川市明苑中	２年	大作　有希
札幌市向陵中	１年	中島　陽莉

高等学校の部

北海道大谷室蘭高	１年	成田　晴海
遠軽高	２年	坂元　星翔
遠軽高	２年	畑　夏紀
旭川藤星高	２年	西股ひかり
旭川永嶺高	２年	小原　優月
札幌光星高	１年	加藤　萌香
札幌光星高	１年	三宅　純蓮
札幌光星高	２年	関　大智
滝川西高	１年	五井　彩桜
函館白百合高	１年	成田　明凜
函館商業高	１年	橘　雅
帯広三条高	１年	堀内　遥
帯広緑陽高	３年	斉藤　由莉
遺愛女子高	２年	丸山　茉綾
札幌聖心女子高	２年	豊嶋　紅安

北海道高文連　第41回全道高等学校図書研究大会（室蘭・伊達大会）報告

全道高等学校図書研究大会が、「鉄は熱いうちに打て〈図書館から私たちの未来へ〉」をテーマに９月30日、10月１日の両日、だて歴史の杜カルチャーセンター等を会場に開催されました。全道各地から503名の参加（図書局・図書委員生徒383名、教職員120名）がありました。

１日目は開会式に続いて「図書館活動（T-1）グランプリ2019」です。図書館でのさまざまな活動の紹介やアピールをまとめたポスター発表による一次予選に参加した19校から選抜された11校が、ステージ上での５分間のプレゼンテーション発表を行いました。どの発表も学校図書館のあり方に新たな問いや気づきを得て、多様な結びつきや居心地の良い空間を作り上げようとする試みにあふれた発表を見せてくれました。生徒全員の投票でグランプリ校には帯広柏葉高校、準グランプリ校には市立札幌大通高等学校、北海道札幌南高等学校の二校が選ばれました。前年度グランプリの石狩南高校の生徒がテンポよく進行から表彰までの運営を仕切ってくれるなど、生徒手作りのステージとなりました。この後参加生徒は14の分科会にわかれ、約３時間にわたって研修や交流を通して多彩な学びに取り組みました。

２日目は、作家の中上紀氏をお招きして、「物語の向こうにあるもの」と題した講演を全員で聴いた後、コンクールの表彰が行われ、図書館報コンクール最優秀賞に北海道札幌月寒高等学校と北海道札幌南高等学校が、優秀賞に北海道帯広柏葉高等学校、北海道北見北斗高等学校、北海道札幌手稲高等学校が入賞しました。

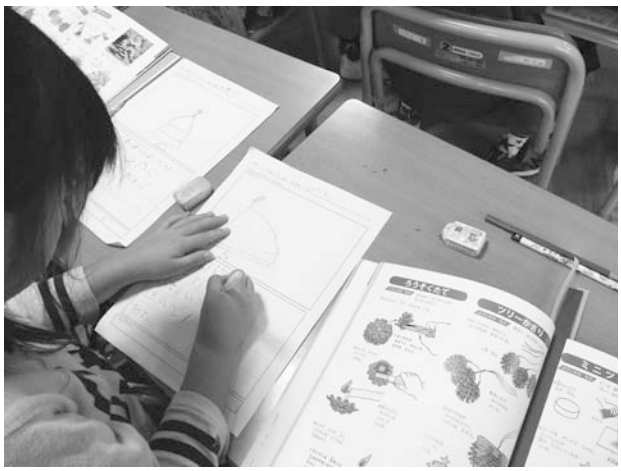
いま道高文連図書専門部では、全国総文祭への参加を視野に、他県の図書専門部とつながり、全国組織を結成する準備を進め、全国・各都道府県SLAも含めた関係組織との協議を本格化させていく予定です。本大会は、学校図書館を生徒が主体的な活動や学びの場として盛り上げていこうとする取り組みをお互いに報告、学び合う貴重な場となっています。これをさらに全国の高校生との交流につなげ、総合的な文化活動へと大いに広げていくことができるよう、来年の道南函館大会の成功を期して参りたいと考えています。

（文責　北海道高文連図書専門部専門委員　加藤　孝志）

第43回北海道学校図書館研究大会旭川大会に参加して

学校図書館とは、『人』

旭川市立永山南小学校　司書教諭　吉　井　華　菜



小学生の頃の学校図書館といえば、カーテンが閉められて薄暗く、締め切られた場所でした。ですが、ある年、学校図書館に大きな変化がありました。司書が配置されたのです。とはいえ、週に1～2日程度の勤務だったように思います。しかし、その後の図書館の変貌が今でも強烈に印象に残っています。カーテンが開かれ明るくなった館内、思わず手に取りたくなるようにディスプレイされた図書、季節にあった装飾や図書の紹介掲示。人が入ることによって環境は大きく変わり、本との出会いにわくわくできる、きらきらした思い出の場所となりました。そんな楽しみを子どもたちにも感じてほしいという思いが、学校図書館に携わる私の原動力です。

より学校図書館のことを学ぼうと、学校図書館研究の道に入ったのは5年前です。学びの場としての学校図書館のあり方をもっと学びたいと思ったのがきっかけでした。それから様々なご縁があり、今回、研究部長として北海道学校図書館研究大会に携わることとなりました。

研究部として研究授業や提言分科会の準備を進めていく中で、私が感じたことは、学校図書館とは、『人』なのだということです。

研究授業において、指導案検討はもちろんのこと、資料の選定では、多くの人の力がありました。授業者、研究部員、学校司書が公共図書館などに足を運んで資料を探し、適したものであるか相談をし、選定しました。資料を見ながら、活用する子どもの姿を想像し、多くの資料から取捨選択することで、子どもたちにとって生きた資料が用意できたと思います。資料が足りないときは、それぞれのネットワークを駆使し、さまざまな場所から集めました。その際、学校司書の皆さんや長年学校図書館研究を進められてきた方の、学校図書館仲間のつながりがとても頼もしかったことを覚えています。

また、子どもたちと本や資料とをつなぐのも、人の力でした。授業では、子どもたちに図書との出会いの場を設けたり、必要な情報を見つけるための、指導・助言をしたりするために、授業者や司書教諭、学校司書がそれぞれの役割をもって協働しました。さらに、子どもたち同士が本を通して、自分の考えを伝え合ったり、資料の情報について話し合ったりと、子どもたち同士のつながりが生まれることも実際の授業を見て感じました。

道内から集まった提言を拝見させていただいても、学校図書館に携わる人が知恵を出し合い、協力している様子が伝わりました。分科会や交流会などで、道内各地の方とお話をさせていただいた時も、仲間とのつながりをとても感じました。

学校図書館は、「そこに本がある」だけの場ではなく、学校図書館を創る人がいて、それを活用する人がいる場であり、人と人がつながる場だと感じることができました。多くのことを学ぶ機会となった今大会に関わったすべての皆様に、感謝申し上げます。

学校図書館情報

◆第52回北海道学校図書館研修講座へ参加を

・日時　令和２年１月７日(火)～９日(木)
・会場　北海道立道民活動センター（かでる２・７）他
・講演　「心弾む学校図書館のために
　　～学校図書館ガイドラインに込めた思い～」
　　青山学院女子短期大学教授　堀川　照代　氏
・講義・実習・討議・交流の充実した３日間
　※詳しくは案内要項、ＨＰでご確認ください。

◆第47回中学生作文コンクール審査終了

各地区からの作品応募、審査協力ありがとうございました。「新時代に思うこと」のテーマで、今年も１万４千点を超える作品が寄せられました。引き続き、参加校数の拡大と応募数の増加を期待します。

中央表彰式　１月７日(火)　13時開催
　北洋大通センター４階セミナーホール
　(札幌市中央区大通西３丁目７番地)
・道東地区：１月９日(木)　13時開催
　北洋銀行釧路中央支店３階会議室
・道北地区：１月10日(金)　13時開催
　旭川北洋ビル８階小ホール
・日胆地区：１月14日(火)　13時開催
　室蘭プリンスホテル４階（桃山の間）
・道南地区：１月15日(水)　13時開催
　函館北洋ビル８階ホール

◆第50回学校図書館賞にご応募を！

本賞は次の３区分。応募期間は各部とも2019年10月1日～2020年1月31日(当日消印有効)＜詳しくは全国ＳＬＡのＨＰをご覧下さい＞

運動の部 (学校図書館運動の推進)
・学校図書館運動（読書運動を含む）を積極的に推進し、全県、あるいは地域の学校図書館を著しく振興させた業績を顕彰します。

論文の部 (学校図書館に関する著作・論文)
・学校図書館(読書指導を含む)について体系的にまとめた著作・論文（博士・修士の学位請求論文は除く）で2019年2月1日以降に完成したもの。学校図書館研究および実践の発展に貢献した業績を顕彰します。

実践の部 (学校図書館の実践活動)
・学校図書館の経営・運営、読書指導、情報活用能力の育成指導、読書推進活動などにおいて卓越した実践を展開し、学校図書館または子どもの読書の発展に貢献した業績を顕彰します。

事 務 局

事務局長　渡　部　浩　士（札幌市立稲積中校長）
事務局校　札幌市立稲積中学校
〒006-0814　札幌市手稲区前田4条5丁目2-1
TEL 011-684-1430　FAX 011-684-5738

Amenity
B-Coat

本の破損や汚れを防ぎながら、抗菌効果を発揮するブックカバー「アメニティＢコート」ポリプロピレンフィルムのため、燃焼時にも塩素ガスなど有害物質が発生せず、安心です。ご指定の上ご愛用下さい。

キハラ株式会社
〒062-0035 札幌市豊平区西岡5条3丁目8-15
ＴＥＬ（011）857－3331
ＦＡＸ（011）857－5211

◆『学校図書館ガイドライン』活用ハンドブック
実践編　堀川照代 著
2019年10月10日　悠光堂　1500円＋税
ISBN978-4-909348-10-4

本書は、昨年度発刊された解説編に引き続き、「学校図書館ガイドライン」について、詳しく説明している良書です。特にボリュームあるＱ＆Ａは具体的でわかりやすく、また実践事例も紹介されています。解説編とともに、ぜひ手元において活用したい１冊です。

著者「堀川照代」さんは現在、青山学院女子短期大学教授であり、学校図書館ガイドラインについて最もお詳しい方のおひとりです。１月に行われる第５２回北海道学校図書館研修講座ではご講演をいただきます。私たち学校図書館関係者にとって必読の書と言えます。

編 集 後 記

いつの間にか暦も師走。寒さも厳しくなってまいりました。皆さま、お変わりなくお過ごしでしょうか。本号は第65回青少年読書感想文全道コンクールの特集号です。全道各地から届いた読書感想文を読むことで、子どもたちの確かで豊かな本との出会いが感じられ、とても喜ばしく思います。日々ご指導に当たられている皆様のご尽力に敬意を表します。来年も、より多くの子どもたちの、読書感想文コンクールへの参加がありますことを祈念しています。

（編集：村山　知成　杉本　操　野村　邦重
　　大久保雅人　渡部　浩士）

ホームページアドレス
http://sla.gr.jp/~hokkaido-sla/